新釈・羅生門

目盾　二十一

或日の暮れ方の事である。一人の貧乏学生が、明治大学第一校舎の下で雨やみを待っていた。

巨大な第一校舎の下には、この男の外に誰もいない。この建物が明治大学和泉キャンパスの第一校舎である以上、この学生の外にも、雨やみを待つ不埒なカップルや雨やみを 待つ不埒な男女の二人連れ、さらには雨やみを待つ不埒な男女のアベックなどがいてもよさそうなものである。しかしどうしたことか、この男以外には誰もいない。

何故かと言うと、この二三週間、明治大学には、期末試験とかテストとかレポート提出の締め切りとかいう災が続いて起こった。今も続いている。そこで学生の草臥れ方は一通りではない。ある者はどうにも課題の首が回らなくなり、下宿の窓を打ち破って夜明けの街に咆哮した。ある者は語学の落単必至を悟り、静かな心持で日夜、森見登美彦を読み漁った。生活がそんな有様であるから、誰も休日に大学へと出向いてイチャコラしようなどとは露程思わない。この雨やみを待つ学生もまた、延滞しそうであった本を渋々図書館へと返却しに来ただけであった。

テスト期間中の大学はディストピアと化す。学生の目は普段の輝きを失い、堀は深く、そこには虚無の二文字だけが映る。そして当てもなくキャンパス内を放浪し、似たような境遇の人物を探しては、お互い教授の悪態をつき合い、レポートの無意味さを正当化しようと詭弁を振り回し、無意味に浪費したくせに時間が無いと嘆く。

それは地獄と言っても過言ではなかった。

すると荒れ果てたのをよい事にして、課題やってない詐欺を得意とする詐欺師が現れる。レポートの盗人が現れる。とうとうしまいには、試験に惨殺された引き取り手のない死人を集めて、居酒屋に棄てていくという習慣さえ出来た。

作者は先ほど「貧乏学生雨やみを待っていた」と書いた。しかし、学生は雨が止んでも、格別どうしようという当てはない。なんならリュックサックから折り畳み傘を取り出すこともできる。普段であればとっとと傘を差して帰っているところだが、学生は家に帰りたいと思わなかった。なぜなら家に帰れば、そこには目の背けようもない、ひどく、こう、なんというか、なんとも形容し難い現実――要するに課題の山が彼を待ち受けているからである。だから「学生が雨やみを待っていた」というよりも「雨に降り込められた学生が、これ幸いと現実逃避をして、突っ立っていた」という方が適切である。

しかし彼が家に居ようがいまいが、得体の知れない不吉な塊は彼の心を容赦なく押さえつける。いや、得体は知れている。彼は何を措いても差当り明日締め切りのレポート(手つかず)をどうにかしようとして――いわばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめのない考えを頭の中で転がしていた。

雨は第一校舎を包んで、ざあっという音を立てながら地面を打っている。夕闇は次第に足元まで来て、空は数時間前と変わらず、今にも落ちてきそうな重たい雲が覆っている。

どうにもならないことを、どうにかする為には、手段を選んでいる余裕はない。そんなことをしていれば、文学部事務室か、職員室の前で、土下座をするはめになる。そうして、居酒屋へと運び込まれ、同じ境遇の奴と傷を嘗め合いながら、朝日を迎える事になる。

選ばないとすれば――これは彼にとってあくまで仮定の話である。選ばないと「すれば」はあくまで「すれば」

の話であり、「しなければ」で済むのであれば「すれば」を考えないくてもいいのだが、結局のところ彼は「すれば」を考えざるを得ない状況にあり、彼の思考は何度も「しなければ」と「すれば」の間を行ったり来たりして、「すれば」と「しなければ」の境をきめると「すれば」とか、「すれば」と「クレバー」ってちょっと語感が似てるなとか考えたりした。当然「手段を選ばないとすれば」の話は、「レポートの盗用をする外ない」というところへと帰結するわけだが、彼はそのことを積極的に肯定するだけの勇気が出せずにいた。

彼は大きなくしゃみをして、めんどくさそうに傘を差した。雨は冷たく、風も吹いていて、上に一枚羽織ってないと寒いほど、空気は冷え込んでいた。

彼は首を縮めながら正門を抜け、駅へと歩いた。彼は駅前の商店街をぐるりと見回した。雨風の患えのない、課題を思い出す可能性の低い場所で、もう少し現実逃避をしようと思ったからである。すると幸い、マイクを持ったリスの看板が目についた。ここなら歌を歌うことに集中でき、憂鬱な現実を忘却することができるかもしれない。たとえそれが、一時的なものであったとしても。

それから何分か後のことである。カラオケボックスの二階、２０２号室の前で、一人の男が唖然とした表情で立っていた。先ほどの貧乏学生である。彼は、現実逃避をするのは自分だけであると高をくくっていた。それがカルピスソーダを片手に、ふと他人のボックスの中をそれとなく覗いてみると、なんとそこでは彼が良く知っている人物が、気持ちよさそうに天体観測を歌っていた。檜皮色のＴシャツを着た、背の低い、痩せた、猿のような見た目をした幸田という人物である。

幸田は良い噂を聞かない。講義には滅多に参加せず、参加したとしても最前席でポケットモンスターをやっている。そのくせレポートや試験の結果はそれほど悪くなく、成績表もＦの陳列場となることがない。そのことから、幸田が手段を選んでいない人物であろうことは、容易に想像できる。そのいかにも意地汚そうな悪辣な見た目も相まって、幸田に近づこうとするものはあまりいない。

彼は幸田の気持ちよさそうに歌う姿を見て、或る強い感情が湧き上がってくるのを感じた。

奴は俺と同じ講義を受けていたはずだ。それならば、禿頭の馬鹿講師が我々に課した、魔の権化のようなレポートの締め切りが明日に控えている筈だ。それなのに奴はそのことを意に介する様子もなく、気持ちよさそうに天体観測を歌っている。奴がレポートを真面目にやる筈がない。それならば、どうぜまた手段を選んでいないに違いない。

幸田の醜悪な顔から、爽やかな汗が一滴ずつ落ちるに従って、彼の心の中に幸田に対する激しい憎悪が募っていった。――いや、この幸田に対すると言っては、語弊があるかもしれない。寧ろ、ありとあらゆる悪に対する反感が、一秒ごとに強さを増していったのである。

こいつは、こいつらは人のレポートを盗んで平然としている。俺がこれほどレポートに苦しんでいるのに、こいつらは悠然と歌唱を楽しみ、夕食にエビのチリソースを食べ、恋人と不埒なことをしているのだ。これを悪と呼ばずしてなんと呼ぶべきか。しかるべき制裁を加えなければならない。断じてこのような悪を野放しにしてはならない。ぶっ殺してやる。

彼は幸田が歌い終わるのを見届けると、勢いよくドアを開けた。そしてカルピスソーダを片手に、大股で幸田の前に歩み寄った。幸田が驚いたのは言うまでもない。

「な、なんですか、いきなり」

幸田は尋常ではない様子を察知し、飛び上がった。

「おのれ、どこへ行く」

彼は、幸田が机に躓きながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いでこう罵った。幸田は、それでも彼をつきのけて行こうとする。彼はまたそれを行かすまいとして、押し戻す。二人はボックスの中で、暫く、無言のまま、掴みあった。しかし勝敗は、はじめからわかっている。彼はとうとう、幸田の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。

「ぼ、ぼくが何をしたっていうんですか」

「うるさい。貴様のような盗人が、楽にレポートを提出するなんてことがあってたまるか」

彼は手にぐっと力を込めた。幸田はうっと呻いて、ただでさえギョロリとした目をさらに大きく見開いた。

「ぼ、ぼくの話も聞いてくださいよ。これじゃあ、あ、あんまりだ」

そう言う幸田の様子はあまりにも情けなく、彼の心の中の激しい憎悪は徐々にしぼんでいった。

「ならば言ってみろ」

解放された幸田はゲホゲホと言いながら、ヨレヨレになった服の皺を伸ばした。そしてジッパー付きのポケットからＵＳＢを取り出した。

「確かに僕は他人のレポートを盗みました」

彼は予想通りの答えに失望した。そして先ほどの憎悪が再燃し始めた。それが幸田にも伝わったのかも知れない。幸田は慌てて後を続けた。

「でも、でも、聞いてくださいよ。このレポートは僕の知り合いのものなんですがね、彼は以前、僕にレポート

の件で泣きついてきたんですよ。そのとき僕は、彼に多少なりともアドバイスをしてやったのに、その恩を仇で返しやがったんです」

「アドバイスといっても、どうせ、どこのサイトから盗用すればいいか、みたいなものだったんだろう」

「そ、それはそうですが、要するに、僕は今回、その知り合いのパソコンからレポートを盗みましたけど、程度の差はあろうとも、似たようなことを皆やってるんです。ウィキペディアやらインチキブロガーみたいなところから、盗用してるんです。でも仕方ないんです。仕方ないんですよ。そうしなければ土下座をしなければならなくなる。居酒屋に犬のように棄てられることになる。手段を選んでいたらこの大学では生きていけない。だから、仕方ないってことをよく知っていた僕の知り合いも、今回、僕がした事を大目に見てくれるに違いありません。そういえば明治大学には三文文士会という総合文芸サークルがあって、そこに所属していれば非常に有意義な学生生活を送れるらしいですよ。有り余る日々のエネルギーを創作活動に充てることができるし、自分の作品が部誌に載るのは気持ちの良いものです。それに夏と冬には合宿もあって、上下の垣根を超えた交流ができるし、毎週金曜日には居酒屋で飲み会もあります(今は無理だけど)。もちろん小説を読むのが好き、という方も大歓迎ですよ。三文文士会は緩いサークルなので、出席のノルマはありませんし、小説を書こうが書かまいが。読もうが読ままいが、そんなことを気にする必要はありません。小説だけではなく詩とか論評とかも取り扱ってますよ。ジャンルレスって感じですね。ちょっとでも文芸に興味ある方は、覗いてみるといいかもしれません。年会費は無料です。実際に所属している人の話によると、所属しているだけで成績はアップするし、異性からのアプローチも多くなって困っているとか。それに美顔効果もあって女性にもお勧めですしなんなら便秘も改善するとかしないとか」

幸田は早口にそうまくし立てた。

彼は冷然として、その話を聞いていた。そしてしばしの沈黙の後に、確認するように言った。

「きっと、そうか」

そうして、一歩前へ踏み出して、不意に幸田の胸倉をつかんで引き寄せると、噛みつくようにこう言った。

「じゃあ、俺がお前のレポートを盗もうが、大目に見てくれるんだろうな。俺もそうしなければ、生きていけない状況なんだ」

彼は、素早く、幸田の手からＵＳＢを奪い取った。それから足にしがみつこうとする幸田を、手荒くソファへと蹴り倒した。急いで一階のフロントに向かい、会計を済ませて外に飛び出した。

しばらく、死んでいたように倒れていた幸田が、ソファからその体を起こしたのは、それから間もなくのことである。幸田はつぶやくような、うめくような声を立てながら、一階へと向かった。そして自動ドアから外の様子を伺った。

そこには、唯、ビードロのように黒々とした夜と、粉々になったＵＳＢが落ちているばかりである。

貧乏学生の行方は、誰も知らない。